

主論文要旨

氏名 大竹 昌巳

題目 契丹語の歴史言語学的研究

要旨

契丹語は、10世紀から12世紀の間にマンチュリア・モンゴリアおよび中国本土北部にわたる範囲に「遼（契丹）」と呼ばれる大帝国を築いた契丹人の言語である。契丹語は、契丹人自らが創製した2種類の契丹文字によって知ることができる。本論文は、契丹小字文献を主要資料として契丹語の音韻論的・形態論的諸特徴および契丹小字の文字論的特徴を明らかにし、さらに契丹語資料によって当時の漢語音を再構したものである。

本論文は全6章と附録から成る。

第1章〈序論〉は、主に契丹語資料について述べたものである。契丹語資料としては、契丹小字文献、契丹大字文献、および漢文文献中の漢字音写資料があるが、このうち本研究で主要資料とする契丹小字文献はほぼすべてが金石資料（特に石刻資料）であり、中でも墓誌銘が圧倒的多数を占めるため、その様式と既公刊資料の基本情報についてまとめてある。

第2章〈文字篇〉は、契丹小字の文字体系を明らかにしたものである。まず、第1節は契丹小字の視覚的構造について整理したもので、字素目録を示し、単位構成原理（字素から字を構成し、さらに字から行へ構成する原理）とその例外について述べた。

第2節では、契丹小字の音価推定に関して先行研究で採られてきた方法や主張を概観して問題点を指摘し、先行研究の設定する音価がいかに妥当性のない推定に基づくものであるかということ述べた。その上で確実な証拠と推論のみに基づいて語形・音価の推定を行なうべきだということが確認される。

第3節では実際にその確実な証拠と方法によっていわゆる「解読」を展開している。使用されるのは漢語借用語表記と契丹語韻文の押韻、そして綴字における母音重複現象であり、これらの資料の分析によって契丹小字の各字素が表わす音価や綴字の規則が帰納され、契丹小字の表記特徴が明らかにされる。顕著な特徴としては、契丹小字の根幹部分を成す字素が〈母音＋子音〉という母音先行型の音節文字であるという類型論的に稀な特徴をもっていることが指摘される。

第3章〈音韻篇〉は、契丹語の音韻体系の解明を試みたものである。まず母音

に関しては、第2章の成果やその他の形態論的ふるまい等を根拠として契丹語の長母音が「開口性」「硬口蓋音性」「唇音性」「咽頭音性」の4つの音韻素性の対立をもつことを明らかにし、短母音ではこれとは違って「開口性」の対立がないことを明らかにした。さらに比較言語学的方法に基づいてモンゴル諸語との音対応を確立し、契丹語に生じた史的音変化を跡づけた。

次に子音に関してもモンゴル諸語との音対応を確立し、それによって契丹語では特に語中において大規模な子音推移が生じていたことを明らかにしている。

第4章〈形態篇〉は、契丹語の名詞類と動詞類のそれぞれに見られる形態的変異を整理し、そうした異形態がどのような特徴によって使い分けられているのかを検討した。名詞類に関しては文法範疇として性・数・格があることを確認した上で、特に格語尾について整理し、そこに見られる異形態について、どのような条件による使い分けが存在するかを検討した。また動詞類についても、各動詞語尾の形態について整理した上で、そこに見られる異形態の条件を検討した。その結果、語幹末音が歴史的に見て子音であったか母音であったかが重要な要因となっていることを明らかにしている。

第5章〈対音篇〉は、解明された契丹語資料を応用する研究であり、契丹語関連資料を用いて遼朝内で使用されていた遼代の漢語音を再構したものである。資料としては、契丹小字表記された漢語語彙を主対象としつつ、さらに契丹大字資料や漢字音写資料なども補助的に用いて、それらを唐代長安音や元代北方音をはじめとする諸資料と比較することで、遼代漢語の声母・韻母・声調等を推定し、漢語北方音の大きな流れの中で遼代漢語の位置づけを明らかにした。特筆されるのは声調に関する成果であり、漢語語彙の契丹小字表記や漢字音写された契丹語資料の分析から、遼代漢語の声調だけでなく契丹語のピッチパターンについても知ることができることを明らかにしている。

第6章〈結論〉では、本研究で得られた成果を整理した。

本論を補足するための附録として、次の3つを収める。

附録1〈押韻語総覧〉は契丹小字文献中の韻文における押韻語を一覧したものである。

附録2〈同源語総覧〉は現在までに発見されているモンゴル諸語との同源語を一覧したものである。

附録3〈契丹小字漢語表記総覧〉は契丹小字文献中の漢語借用語を一覧したものである。

本論文の意義は極めて多岐にわたる。まず、第2章〈文字篇〉では契丹文字が〈母音+子音〉という母音先行型の音節文字を主体とする文字体系であることを明らかにしているが、このような文字体系は類型論的に見て稀有なものであり、この発見は文字類型論の発展に寄与しうるものである。次に、第3章〈音韻篇〉では、まず今までの研究では想定されていなかった新たな音素が複数発見されており、契丹語研究の深化を印象づける。また、モンゴル諸語との音対応規則を大々的に確立し、両者に生じた史的音変化を明らかにした研究はこれが初めてであり、今後の契丹語・モンゴル語比較言語学の基礎となる研究成果である。第4章〈形態篇〉の異形態に関する研究は、契丹語テキストを読み進める上で不可欠な知識を提供するものであり、今後の契丹語研究の基礎となる成果である。さらに第5章〈対音篇〉は、中近世漢語音韻史の中での遼代漢語音の位置づけを明らかにして契丹語資料が漢語史の資料として重要であることを示しただけでなく、漢語表記の分析が契丹語の再構に関しても極めて重要な貢献をなすことを明らかにしている。